

「新収蔵・寄託作品公開 心からのおくりもの」は、近年寄贈・寄託された高崎市や群馬県ゆかりの作家と、同時代を歩んだ作家の作品を「群馬、高崎ゆかりの作家たち」「魂の印象派 木村忠太」「鶴岡政男の素描」というテーマでご紹介する展覧会です。作家たちはそれぞれ何かにときめき、あこがれ、そしてめざめ、ゆめを抱いて人生を歩んできました。今回は群馬、高崎ゆかりの作家たちの「めざめとゆめ」について解説します。

① それぞれのあこがれ

最年長の井上房一郎(いのうえ・ふさいちろう 1898-1993)と最年少の和南城孝志(わなじょう・たかし 1949-2003)の間に約半世紀の年の差がありますが、井上がパリ、和南城がローマに学んだように、同時代の日本人は西洋にあこがれ、西洋の素材や技法に取り組みます。ただ油彩画や彫刻を輸入しただけではありません。井上が伝統的な漆塗^{うるしぬ}りを用いてモダンな《幾何学模様漆塗^{うるしぬ}り盆》を制作し、和南城がイタリアに学んだ石彫で、郷里、桐生の織機^ひの杼^ひを《天の軸》に刻んだように、西洋のものの見方、考え方に会い、それぞれが自分をみつめなおしたのです。

② それぞれのめざめ

1923年フランスに渡り、セザンヌの絵画から「自我を確立し、外界を観察し、社会的創造をなしうることに勇気を持つようになった」井上房一郎は、工芸運動、ついで音楽や美術の普及と支援に力を注ぎます。住谷磐根(すみや・いわね 1902-1997)は10代で「今日から専門の絵描きになるんだ」と叫んで、二〇円の金を懐ろにして上京。山口薫(やまぐち・かおる 1907-1968)はフランス、そして東京から帰郷して《箕輪城跡》を描いた頃のめざめを「感動の真実ということ、それは東洋の写実の精神でもあれば、モデリアニヤ、ゴーガンの道でもあるように思えます」と振り返り、感動に西洋、東洋の違いはないと語ります。その感動は狩野守(かのう・まもる 1929-2004)にとって「人間像が描きたい—それに執着して一連の制作を続けて居ります リアルな説得力を持った絵を描きたい」思いでした。同じリアルについて山名將夫(やまな・まさお 1948-2018)は「絵画の平面性、虚と実、現象と認識、表と裏の関係を思索していた」と語り、目の前の物と、平らな画面や鏡に写された姿の違いをみつめます。実物と想像のイメージの違いです。和南城孝志にとってそれは、自然石が彫刻に生まれ変わる瞬間。「石を刻むということは、イメージの世界の扉を叩く行為^{たた}」でした。佐藤晃一(さとう・こういち 1944-2016)は10歳で「遠足から帰って来て感想の絵を描けっというんで、アブストラクトを描いちゃった」。アブストラクトは抽象絵画のこと。先生が困るのを見て「あ、悪いことしたなって思って、それ以来学校ではリアル、家で抽象という使い分けで描いた」そうです。

③ それぞれのゆめ

1938年、住谷磐根は「長江を航行して美しい風景が、支那の南画の「絵空事」でない真実さを痛感」して水墨スケッチを描きはじめ、のち水墨をライフワークとして「如何にマスターして感激^{いか}の美を表現できるか」努めます。フランスに渡り、セザンヌと同じ場所で描いた狩野守は、セザンヌの「線と面との交差によって織りなす空間描出」を現地で確かめ「血の湧き立つのを覚え」、のち線やタッチに豊かな旅情を吹き込みます。中国で生まれた水墨や、セザンヌの感覚を実現する油彩を、現地で体感したリアルな証言です。佐藤晃一も「日本画の形式が西洋の絵画の形式と違っていることは、デザインにとって参考になることが沢山ある」と語りました。「写すことと実を描くこととは別のこと」と語る山名將夫の「実」は、外の現実ではなく、絵の中だけにある真実。《回想のメロディー》も、目に見えない思い出やメロディーを描こうとします。《(高崎市役所玄関壁画構想) 一朝、昼、晩》で山口薫は、折々のスケッチや思い出を集めて、すべての人の営みを描こうとします。「僕のような抒情性の尾を断とうと思っても切れないもの、それは何だろう。出来れば象徴にまで絵を持ってゆきたいのであるが」というのちの言葉には、自分の心を鏡にしなが、場所や時代や人の違いを乗り越えようとする気持ちが表れています。井上房一郎もまた最晩年に「手の届かないことを勉強する」「哲学」を高崎に届けようとしています。場所や時代や人によって、ときめきやあこがれはさまざまですが、人は目に見えないもの、手の届かないことを夢みながら、それをかたちあるものにして人に届けようとするのです。和南城孝志はわずか53歳で亡くなる直前「いま、水にいちばん興味を持っていましてね。水を表現する彫刻を作りたいのです」と語りました。長年にわたり石を刻み続けた手が、さらに気の遠くなるような歳月をかけて石を刻み続ける水の力を、最期に夢みたのかもしれない。早すぎる最晩年のテーマは、自然そのものでした。

「群馬、高崎ゆかりの作家たち」
展示室のご案内

1階

